『化学サポートシリーズ レーザー光化学』正誤表

（伊藤道也　著，裳華房 刊）

（2012/3/12 現在）

第 2 版（2006 年 2 月発行）にて修正済み　（誤→正）

頁	行・見出番号	誤（修正箇所）	正（修正・加筆方法）
3	7	d cm	d cm
4	6	［右辺］ $\int \phi_1\phi_1\phi_2\phi_2 \cdots \phi_2\phi_3 d\tau$	$\int \phi_1\phi_1\phi_2\phi_3 \cdots \phi_2\phi_2 d\tau$ ［4 番目と 8 番目の下添え字を入れ替え］
	9	［右辺］ $\int \phi_2 e\gamma\phi_3 d\tau$	$\int \phi_3 e\gamma\phi_2 d\tau$ ［ϕ の下添字を入れ替え］
5	図 1･1（a）	［文末に追加する］　．右の波動関数の係数は○正，○（中に斜線）負	
7	式（1.7）	［右辺］ $\int \phi_7 e\gamma\phi_8 d\tau$	$\int \phi_8 e\gamma\phi_7 d\tau$ ［ϕ の下添字を入れ替え］
10	8	vibraonic	vibronic
	10	（$\upsilon' = 1, 2, 3, \cdots$）	（$\upsilon' = 0, 1, 2, 3, \cdots$）
15	下から 7	「，特に一重項励起状態と三重項励起状態の関係部分」を削除する．	
	下から 4～3	「その後の多くの研究者により修正された」を以下の文章と入れ替える． その後，一重項励起状態と三重項励起状態の関係部分は，ルイス（G.N.Lewis，1875-1946）やカシャ（M.Kasha，1920-）など，多くの研究者により修正された（1944-1958）．ここでは，	
18	表 2･1　注釈	「spectra」の s を S（大文字）にする．	
		Publishinng Co.	Publishing Co.
26	6	一重項励起状態	一重項状態
	下から 6	前章で	前項で
33	7	ノーベル賞	ノーベル化学賞
34	4	確率	確率（A）
38	図 3･5　(c)	先頭値	尖頭値
39	11		
41	5	発振するレーザーである．これは	発振する．この色素レーザーは，
42	下から 4	場合が多い．	場合もある．
53	4	分子構造は，	分子構造や，
72	下から 5	ピフェニル基	ビフェニル基
75	下から 2	「$E_{CT} - E_N$ は」の後に「近似的に」を挿入する．	
82	4～10	$Phen^+$ ／ DMA^-	$Phen^-$ ／ DMA^+ ［4 箇所］
	6	一重項励起状態	一重項状態

	6～7	三重項励起状態	三重項状態
	下から 3～2	「9 - アントリール基（D)」の D を A に変更する．	
	下から 2	「(A) *p* - (*N,N* - ジメチルアミノ)フェルニ基」の（A）を削除し，末尾に(D）を追加する．	
90	7	フェノール	ナフトール
	8 下から 7	酸定数	定数
96	9	異動	移動
97	下から 6	［右辺］　Q^{+*}	Q^{*}　［添字＋を削除する］
99	2～6	「Q」についている上添字＋を削除する．　［5 箇所］	
100	下から 5	よく知られている．	8･1 節で述べた．
109	下から 1	考えられるが，明確ではない．	考えられる．
110	下から 3	しかし，	さらに，
	下から 2	構造を明確にするには，回転コヒーレンスなどの高度な研究が必要である．	構造については，時間分解赤外分光により明らかにされている（H. Ishikawa ら，2005）
113	下から 4	T.Tahara ら，2000）	T.Tahara，2000）
116	下から 1	「2001」の後に「；H.Murakami ら，2005」を追加する．	
134	12	「fluorescence」の f を F（大文字）にする．	
138	図 8･12，8･13	分子構造討論会	分子構造総合討論会
	図 8･12	559	5591
	図 8･13	文末に「，参照 *J.Phys.Chem.A.* **2002**，*106*，5591」を追加する．	
	図 9･4	文末に「；*J.Phys.Chem.A.* **2005**，*109*，8959」を追加する．	
140	索引　「カ」	回転コヒーレンス　110	回転スペクトル　86